The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教体験談の構造 ： く転＞による事例の検討
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2020, 46, p. 123-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教体験談の構造
－＜転＞による事例の検討－

川　端　　亮

目　次

１．はじめに
２．ナラティヴ研究としての宗教体験
３．宗教体験談の類型
４．「自利」からの転換

宗教体験談の構造
－＜転＞による事例の検討－

川　端　　亮

1．はじめに

学術的な論文においては、一般にIMRAD（Introduction, Methods, Results And Discussion）形式が使われる。一方で、学術的ではない一般の日本語の文章の場合、四字熟語にもなっている、「起承転結」という形式が使われることも多い。起承転結は、もともとは漢詩の形式であったが、今では日本語の文書の形式としても、かなり広く受け入れられている。

新宗教における体験談を起承転結の形式で考察しようというのが、本稿での目的である。多くの新宗教においては、体験談は布教するうえで、あるいは個々の信者が信仰を深めるうえで、重要な役割を果たすものである。たとえば日本最大の新宗教である創価学会においては、その日常的な活動の主たるものとして座談会があり、そこで体験談は参加者に共有され、それが参加者の信仰を深める契機となる場合もある。信仰を広め、深めるために、一般的にいって体験談はとても重要なものである。

体験談は人の経験を綴ったものである。どのような信仰を持つ人もその体験を書けば体験談といえるかもしれない。しかしながら、たんに経験を綴るだけでは、必ずしも信仰を広め、自分や他者の信仰を深めることに役立つとは限らないことはいうまでもない。印象的な体験談でなければ、自分の信仰の参考にしようと思わせることはできないであろう。本稿では、信仰に資するよい体験談、すなわち座談会等で参加者に感動や共感を呼び起こし、信仰者において共有するに足る体験談を扱う[1)]。

また、新宗教の教団においては、実際に話される体験談と広報紙誌などにおいて書かれた体験談に加え、研究者がインタビューによって聞き取った体験談、さらにはそれを、整理要約等をして、比較的短い文章にまとめた論文上の体験談などがある。本稿ではその中で、教団の機関紙誌や学術研究論文等に書かれた体験談を対象とする[2)]。このように限定しても無数にある体験談のすべてを調べ上げることは不可能であるので、そのような体験談の中の、ある一部のタイプの体験談を起承転結の形式にあてはめて考えてみたい。どのような種類の、どのような特徴がある体験談が信仰を深め、広めるためには有用な感動的な体験談であるのだろうか。

社会調査の方法からいえば、宗教の体験談はインタビュー調査に基づく報告などと同

じように、聞いてわかることに含まれ、見てわかる参与観察やフィールドワークなどとは一線を画すことができる。すなわち体験談の特徴は、見てわかることではなく、聞いてわかるということである。もちろん、他人の意識は外から見ているだけではわからないので、意識を表す体験談が見てはわからないことを示しているので有用と、とりあえずはいえるだろう。

しかしよく考えてみると、意識はそれほど見ていてわからないものだろうか。私たちは日常生活において、「今、あなたは何を考えていますか。」「何を思っていますか」などと聞くことはそれほど多くはない。つまり、行動を見て、意識を推測しつつ、そのまま相互作用を続けて、問題が生じないのである。

社会調査の観点からいえば、見てわかることと聞いてわかることはそれほど齟齬がない場合が多い、つまりどちらの調査法でやってもわかることは同じ、とさえいえる場合も多いだろう。このように考えると、聞いてわかることが最も効果を発揮するのは、見てわかることと異なることを対象者が思っている、あるいは見ていては推測し、理解することができない対象者の考えがある場合である。たとえば 100 万円を投資して、200 万円、300 万円になって返ってくるなら、それに投資する人になぜ投資するのかと尋ねる人はいないだろう。ところが 100 万円投資して、儲かるどころか元本もなくなっているのに、それに繰り返し投資する人にはなぜ投資するのか、と聞きたくなる。これが聞いてわかる聞き取り調査のメリットの例となる。そして、これと同じようなことが信仰を持っていない人が信仰を持っている人を見たときに生じているのである。100 万円献金して、病気が治ったり、商売で儲かるならともかく、まったく何もない、まして病気は治らず亡くなったりする場合もあるのに、変わらず献金をつづける ...

つまり見ているだけでは、合理的に納得できず、聞いてみる必要があり、理解するためにはインタビューをしたり、体験談を聞くことがとても有効な領域、その一つが宗教なのである。

2．ナラティヴ研究としての宗教体験

本稿での体験談の分析は、質的データ分析の分析法の中に位置づけるとすれば、ナラティヴ研究の一つということができるだろう。ナラティヴとは何か、ナラティヴ分析とは何かという定義の問題は、研究者によりさまざまである。本稿では「起承転結の構造で分析ができる、創価学会の布教や会員の信仰を深めるのに役立つひとまとまりのお話し」をナラティヴと考え、分析の対象とする。

ナラティヴ分析にもさまざまなものがあり、たとえばナラティヴ研究の入門書であるリースマン (2014) では、テーマ分析、構造分析、そしてその組み合わせである対話／パフォーマンス分析に分けて説明されている。基本的には、何が語られるかであるテーマ分析と、どのように語られるかの構造分析は、2 つの大きく異なる分析方法といえるだ

ろう。本稿は、テーマ分析なのか、構造分析なのかといえば、構造分析である。

構造分析は、文学の研究などで用いられてきた。ライフヒストリーを時系列として見たときの構造に関する研究は、1928 年のプロップの『昔話の形態学』の以来、試みられている。その後、ラボフ（1972）が、要約、オリエンテーション、事態の展開、評価、結果、結びの 6 つの部分から個人的な体験談は構成されるとした。これをもとにアンダーソン（1994）は、ラボフの集めた体験談は、1 ページにも満たない非常に短いものなので、事態の展開の部分が一つであるが、自分が集めた日本の 3 つの新宗教（善隣会、立正佼成会、崇教真光）の体験談は、語るのに 30 分を超えるようなものなので、この部分をヴィクター・ターナーの研究を取り入れて 4 つにし（Anderson 1995）、要約、オリエンテーション、危機、改善過程、不和、解決や和解、結びの 7 つの段階があるとした（アンダーソン 1994：17-19）。

宗教体験談を含むライフヒストリーは、いくつかの段階・過程として捉え（時系列構造）、その構成要素の過程のそれぞれに、それぞれの人の人生上での意味が載っているもの（意味構造）と考える。そして本稿では、その中の一つのかたまりをナラティヴととらえ、意味構造の分析にはそれほど深入りせずに時系列の構造を単純に起承転結の 4 段階ととらえ、分析していく[3)]。

まず初めに基本となる起承転結を示す。印象的なナラティヴは、導入部が優れている。導入部で聞く人、読む人の心をつかむことが大切である。教団の体験談も聞く人、読む人の興味を引く必要がある。宗教の体験談の場合、起承転結の＜起＞は不幸な状況の記述である。したがって、その不幸、困難を具体的に記述する、その具体性によって、いかに聴衆や読者の心がつかめるのかが決まるので、それが＜起＞の特徴となるだろう。

そして宗教の体験談なので、宗教的な行為や教団が定める儀礼などを実践する段階が＜承＞である。そして何かが起こる。これをとりあえず＜転＞とする。そして最後にそれらの帰結であり、これまでの信仰体験を振り返ったものが＜結＞となる。

次の節で体験談のタイプをいくつかあげる。取り上げる体験談はご利益の体験談、ご利益がなかったが信仰をつづける体験談、不思議なご利益の体験談、＜転＞がわかりにくい体験談、利他性が芽生える体験談などである。そして、体験談を起承転結のパターンに当てはめながら解釈し、とくに＜転＞に絞ってその特徴を明らかにする。なお、体験談は、著者がこれまで研究してきた創価学会の体験談から例示する。

３．宗教体験談の類型

タイプ１　ご利益の体験談

まず、非常に多いご利益の体験談から始めよう。たとえば以下の例が挙げられている。

入会時は失業中で、鬱で、人生の方向性を探していました。1974 年２月にご本

尊をいただくと、近所に住んでいた大学教授と出会い、彼の友人を紹介されました。その人は政治家で、後にシカゴ市長になりましたが、その人に雇われたのです。1974 年 8 月にイリノイ州政府の事務職につきました。それまでは自分は工場で働いていて、はじめてのオフィスワークでしたし、給料も今までで一番よかったのです。それで、より熱心に信仰しました。（川端・稲場 2018：24）

この例は、宗教の体験談の構成要素がコンパクトに表れている。この部分は長い体験談の一部を切り出したもので、最初の部分ではないので、ラボフのいう「要約」の部分はなく、また最後の部分でもないので「結び」もない。しかしそれ以外はラボフのナラティヴの構成要素がみられる。すなわち、失業中で鬱で人生の方向性を探していた部分が、「オリエンテーション」、ご本尊をいただいたことから事務職に就くという部分が「事態の展開」となり、給料が一番よかったのが「評価」、そしてより熱心に信仰するという「結果」になる。

もちろん、分析の目的によってはラボフに従うことも有効であろうが、宗教の体験談から信仰の深まりを考察する場合には、ラボフよりももう少し簡略化することができるのではないかと思われる。まず信仰活動に入るまでを＜起＞としてひとまとめにする。宗教の場合、これは困難な剥奪的状況であることが多い。つぎに、人に誘われて教団の儀礼を実行するようになる。これを＜承＞とする。その後ご利益体験などの大きな出来事があり＜転＞、それに何らかの意味付けがあり、入信したり、信仰がより深まったりすることになる部分を＜結＞とする。

このご利益体験という＜転＞は、世俗の世界で過ごしてきた人々にとっては、まさにありがたい出来事であり、信仰を始めるきっかけとなる。タイプ１は、世俗の世界での困難とそれを打破した事例であるが、その結果入信した、信仰を熱心にするようになったという記述はよくあるが、その時の内面の変化については、あまり語られていないように思われる。おそらく、創価学会の信仰者がご利益体験を振り返って考えれば、そのご利益は、あくまで唱題という日々の営みによって、聖なる力が働いた、不合理な、世俗では解釈不能なありがたい結果、すなわち＜転＞であるとなるはずだが、そのような内面の解釈は体験談では触れられることが多くはないように思われる。なぜなら信仰を持たない人がなぜご利益によって信仰を始めたのですかとは尋ねないからである。信仰の理由として、ご利益はもっとも理解し納得できる理由だからである。失業していて、信仰を始めて、今までよりも一番よい仕事に就いた、ということが見てわかれば、それ以上になぜ信仰を始めたのかとは尋ねないからであろう。このようにご利益の体験は多くの人を納得させる強力な体験であるといえる。

タイプ２　ご利益がなかったが信仰を続ける体験談

宗教の体験談の場合、基本的には剥奪状況からの回復の物語といえる。剥奪状況にあり、

そこから逃れるという願いがあって、信仰を続ける。いわゆるご利益信仰である。しかしながら、体験談においては、ご利益はなかったのに信仰が強まったというパターンも見られるのである。信仰を持たない、宗教の外にいる人間にとっては、これは、非合理であるので、このような体験談が成立することを分析することは、それなりに面白いといえるだろう。

「尽くす心」

「御本尊への確信がないから、そんな無慈悲で冷たいことが言えるんです」。折伏の重要性を感じていなかった私を強く諌めてくれた先輩。「確信をつかむ唱題に挑戦しなさい」と。

先輩の心が理解できず、泣きながら家に帰った。私のどこが冷たいのか、わかりたくて必死に祈るうちに、それまでの自分の信心の姿勢を見つめることができた。

信心に励む両親のもと、六人姉兄の末っ子として生まれた。勤行や活動をするのは当たり前。鼓笛隊にも入った。でも、いつも心のどこかに、“やらされている”という思いがあった。受け身の信心だったんだー。そう気づいたとき、生命の底から、御本尊への確信をつかんでみたいと思った。

一時間、二時間と真剣に祈る日々が続くさなか、同乗していた車が大事故に遭った。右目を支えるほとんどの骨が砕け、眼球は陥没。医師からは失明の宣告をうけた。しかし、私の右目は見えた。誰が見ても即死と思う事故から守られた。

幾度か手術を重ねたが、もと通りには治らないと分かった。諦めきれず、死んだ方がよかったと泣いて過ごしていた私に「宿命転換するために折伏しよう」と先輩は何度も足を運び、励ましてくれた。自分がこんなに苦しいのに他人のことなど、と思った時、かつて先輩から言われた「冷たい」「無慈悲」の言葉が浮かんだ。初めて本気で折伏に挑戦。お世話になった看護婦の方への御本尊授与の日のことは忘れられない。

その二年後、目の不自由な私にも「あなたにしかできない使命が必ずあるから！」と先輩に励まされて職を探し、福祉の仕事で社会復帰することができた。

お年寄りや障害者の方と関わり、組織で部員と関わるなかで、相手のことを祈れる自分になれた時、あんなに悩んだ目のことも気にならなくなっていた。就職して十一年を迎えた今、目がもとに戻らなかったことも、信心を求め抜く自分になるためだった、と心から思えるようになった。

「生命を大事にする」ということは、人に尽くし切っていく生き方だと実感する。生命がもつ無限の力を開かせてくれるからだ。そのことを教えてくださったのは、池田先生だ。福祉の仕事、学会の世界で「人に尽くす心」を鍛えさせていただいていることに、感謝の思いは尽きない。

これからも、一日一日を広宣流布のために生命を使い切っていきたい。それが、

励まし続けてくれた先輩、同志、家族、今は亡き父と信心を教えてくれた母への孝行であり、師匠への報恩だからだ。(『大白蓮華』2000-4：49)

この体験談は、最初が少し奇妙な形で始まっている。時系列的には３段落目の「信心に励む両親のもと、六人姉兄の末っ子として生まれた。勤行や活動をするのは当たり前。鼓笛隊にも入った。でも、いつも心のどこかに、“やらされている”という思いがあった。」という状況が最初にあって、それから冒頭の先輩の言葉につながる。つまり、時間の順序通りに記述されていない。物語は、基本は時間の順に従って述べるものなので、この体験談の始まりは、奇妙である。なぜであろうか。それに意味はあるのだろうか。

そして先の例と異なり、信仰をしていない状況から始まるのではなく、すでにある程度の信仰がある状態から始まる＜起＞。これは二世信者に見られる状態といえるだろう。そして＜承＞もこれまでの例と異なり、信仰にかかわる行動を継続していくというよりは、世俗の交通事故で右目が失明するかもしれない重症状態から、治療していく過程が＜承＞である。その最終の状態は、失明は免れたものの、「幾度か手術を重ね」ても「目の不自由な私」であった。

そして、福祉の仕事で復帰したのが＜転＞である。これにより、「あんなに悩んだ目のことも気にならなくなっていた」とある。つまり、目のことは気にならなくなったのであり、けがが治ったわけではなかった。しかし、肉体的な目のことではなく、「「人に尽くす心」を鍛えさせていただいていることに、感謝の思いは尽きない」とあるのが＜結＞の肝心な部分である。

この体験談は、信仰のない人の目から見れば、けがも治らないのに信仰を続けているように読める。しかしそれでは読者はご利益もないのに信仰を続けることが納得できないだろう。この＜転＞に注目する重要性は、それによってどこが＜結＞であり、＜結＞の意味が何かがわかるからである。＜結＞の部分を「生命を大事にする」ことを知るというご利益が得られたのだと読んでみよう。それは交通事故で瀕死の重傷から回復して命の大事さを知ったともいえるだろう。しかしここではそれだけではない宗教的な意味が重ねられている。命を大事にすること＝生命が持つ無限の力が開かれる、すなわちご本尊の力である。最初に書かれている「ご本尊への確信」が、本気で折伏するなどの信仰活動をつづけた＜承＞の結果、最後に得られたのである。このように読めば、最初に示された願いは、最後にかなえられている。その結びつきを明確にするために、冒頭の部分が時間の順序という法則を破って、倒置された構成になっているのである。

タイプ３　不思議なご利益の体験談

一人の人の信仰の過程をもう少し長い目で見てみると、さらに大きな＜転＞が見いだされるケースがある。最初の段階でご利益がもたらされることは、信仰に入るきっかけとして、大きいと思われる。最初の段階でご利益がないと、信仰に入らない、唱題を辞

めるという結果になるだろう。しかしながら、最初にご利益があり、さらにある程度の期間信仰を続けても、さらによい結果がもたらされるとは限らない。病気の人を祈ってもすべての場合に完全に治癒すると断言するのは、合理的に考えれば難しい。そのような場合にも＜転＞はある。

「あの人がいてくれた」

私が 5 歳の時、母は父と離婚、そのままどこかへ行ってしまいました。その後、祖母と父、妹と私の 4 人で暮らすようになりました。

しばらくして、父は暇さえあれば、酒を飲むようになっていきました。酒が進むにつれ、だんだんと言葉遣いが乱暴になり、物を投げたり、暴れたりするようになるのです。

やがて父は食事もせず、仕事にも行かず、それこそ朝から晩まで酒浸りに。祖母も、このままでは心身共にダメになると思ったのか、父を強制的に入院させました。

しばらく療養した後、父は退院してきました。以前の優しい父でした。「もう、飲まない」。父は心から反省していました。

なのに･･･。気がつくと、父はまた酒に手を出していました。結果、また病院送りに。そんなことが何度も繰り返されました。

父が嫌いになり、憎むようになり、いなくなればいいと思うようになりました。

そのころの私を支配していたもの。それは「あきらめ」でした。父を置いて、どこかに逃げたいと思うけれど、現実から逃げることなどできるわけがありません。つらくて、悲しいけれど、自分ではどうすることもできませんでした。

夢も希望もありませんでした。父は精神病院に入退院を繰り返しました。この先ずっと関わらなければいけないのです。「一体、何のために生きているんだろう ?」そんなこと、ばかり考えるようになりました。

高校 2 年の時でした。わが家の現状を見かねて、父の同級生だという、下道さんご夫妻が、折伏に来てくれ、こう言うのです。「信心すれば、お父さんは必ず酒を飲まなくなるよ」と。

うれしくなって、私は即答しました。「その信心、やります」と。理屈などどうでもよかったのです。頼りになる確かなものがほしかったのです。

私が入会したことに、祖母も親戚も猛反対し、大変な騒ぎとなりました。そんな私を、下道さん夫妻は全力で励ましてくれました。「大丈夫、絶対、幸せになれるから」

学校が終わると、毎日のように、下道さんのお宅に伺い、一緒に題目をあげました。

入会から百日たった時、驚くことが起きました。「ずっと神棚に祈ってきたけど、何もいいことがなかった。その信心、私もやってみる」と、祖母が入会を申し出たのです。

「現実というのは変えられるものなんだ」。あきらめに支配されていた私の心に、

ほんのりと希望の火がともった瞬間でした。

その後も、下道さん宅に通い、学校のこと、父のこと、将来のことなど、いろんなことを相談しました。下道さんは、親身になって私の話に耳を傾け、力強く励ましてくれました。私の心は、少しずつ前向きになっていきました。

下道さんの励ましのおかげで、創価大学の通信教育部を経て、平成3年から小学校の教員になることもできました。平成7年には結婚することもできました。

しかし、父が酒をやめることだけは叶いませんでした。父はずっと酒を手放さず、入退院を繰り返していたのです。

入会から10年たった日のことでした。しんしんと題目をあげながら、父のことを考えていました。「もし、このまま父が死んでしまったら」そう思った途端、父はなんて寂しい人生なんだろう。と、涙が止めどなく溢れてきたのです。あんなに嫌っていた父なのに... 私は初めて、心の底から祈りました。「父さん、幸せになって」と。

その直後でした。退院してきた父が、私にこう言ったのです。「もう酒を飲みたいと思わなくなった」と。

この日以降、父は酒をピタリとやめました。うれしいことに、入会もし、唱題に励むまでになったのです。平成10年、父は病気のために他界しました。でも、その顔は本当に穏やかでした。

下道さん夫妻と出会えたことで、本当の親孝行をすることができました。そして何より、私の心に居座り続けていた「あきらめの心」を打ち破ることができたのです。

私は今、胸を張って言えます。「あきらめずに努力を続ければ、必ず道は開ける」と――。(『大白蓮華』2010-4：102-103)

アルコールに依存する父。入退院を繰り返してもお酒をやめられない。お父さんがお酒を飲まないようにと祈り続ける娘。そして入会から10年たった日に、「「もし、このまま父が死んでしまったら」そう思った途端、父はなんて寂しい人生なんだろう。と、涙が止めどなく溢れてきたのです。あんなに嫌っていた父なのに... 私は初めて、心の底から祈りました。「父さん、幸せになって」と。」すると父は酒を飲まなくなったというご利益体験談かと一見すると思われる。しかし、10年たったある日に祈ったらなぜ父は酒をやめられたのだろうか。学会の会員であれば、「題目の力だ」というところであろう。その意味では、この体験談は、学会の会員の納得が得られるナラティヴといえるだろう。しかし、会員でない、一般の人には「題目の力だ」では納得できない。なぜご利益が得られたかがわからず、これだけでは共感できないのである。

＜結＞にあたる最後の4段落を再度見てみよう。2段落を使って、父が酒をやめ、穏やかな顔で他界したことが書いてある。しかしそのあとの2段落で、「私の心に居座り続けていた「あきらめの心」を打ち破ることができた」と書かれており、「あきらめずに努力を続ければ、必ず道は開ける」と「あきらめ」という言葉が短い間に2回繰り返され

ている。そして、この部分が最後であり、＜結＞の部分なのである。父がお酒をやめて、よかったという＜結＞ではない。

もう一度、「あきらめ」に注目してみてみると、最初の方でも「あきらめ」は登場している。父がアル中で困っていた時には、「そのころの私を支配していたもの。それは「あきらめ」でした。」とある。さらに、父のアル中からの回復の物語だと思って読んでいると、ストーリーにあまり関係のなさそうな、祖母の入会というエピソードが唐突に出てくる。とくに非会員の信仰を持たない者にとっては、非合理で反感を買いそうなエピソードではあるが、この時に、「あきらめに支配されていた私の心に、ほんのりと希望の火がともった瞬間でした。」と書かれてある。このフレーズを入れるために、祖母の入会は必要なのである。父のひどい酒浸りで「あきらめ」に支配されていた状態＜起＞から創価学会に入会して、祖母も入り、「あきらめ」が打ち破れるのではないかと希望が灯る＜承＞。入会後、10 年の題目を上げていた日が＜転＞で、自分にとってはひどい父のために祈るという他人のために心から祈る、という内面が大きく転換したことにより、＜結＞として、あきらめの心が打ち破られるという、あきらめを少しずつ打破していく物語と読めるのである。10 年にわたる信仰の結果、あきらめが打破できたという個人の内面の変化ならば、非会員も、ありうる話かもしれないと考えうる。父が突然、お酒が飲みたくなくなるよりも、信仰を持たない人には納得できる物語となっている。

タイプ２とタイプ３の事例から、顕在的な剥奪（交通事故の後遺症、父の飲酒）から回復するために、信仰に入り、信仰をつづける。しかしその剥奪はタイプ３のように非合理的に満たされても、あるいはタイプ２のように満たされなくてもよい。顕在的な剥奪の回復の結果にかかわらず、別の何かが満たされる。そしてその満たされる何かは、最初から意図されていたものではないだろう。文章となった物語としては、最初から伏線が張ってある場合が多いが、本人はいつからその潜在的な願望に明確に気づいていたのかは、わからない[4)]。タイプ３のように、顕在的な剥奪（父の飲酒）に潜在的な剥奪（あきらめ）が置き換わる瞬間が、＜転＞の時であり、ここに劇的な体験（しんしんと題目をあげた日に涙が止めどなくあふれてきた体験）があると分かりやすいナラティヴとなるのである。

タイプ４　＜転＞不在の体験談

「星は夜に輝く」

生後 100 日足らずで母が他界。中学 2 年生の時、離れて暮らしていた父も事故で帰らぬ人に。親の愛情も知らないまま、親戚の店で働き始めました。しかし、酒癖の悪い叔父の酷い扱いに耐え切れず、後の夫と逃げ出しました。結婚した時、私はまだ 19 歳でした。

その後、3 人の娘を出産。夫は電気施設の仕事にいそしみながら、家族を大切に

してくれました。“ああ、これが夢にまで見た「家庭」なんだ”と、幸せをかみしめていました、

ところが、昭和50年3月、夫が誤って3300ボルトの高圧線に触れてしまい、亡くなったのです。明るかった家は、突然、闇夜に覆われたように真っ暗に。私は、外出すらできず、家の前を通る車のエンジン音を聞いては、“主人が帰ってきた”と、玄関に向かってしまうほどでした。

そんな時、学会員の友人が、「宿命転換」の話をしてくれました。以前、横浜の叔母から折伏されたことがありましたが、その内容が、全く同じだったのです。私は驚き、“信心で宿命転換して、本当に幸せがつかめるのであれば、やってみよう”と決意。その年の暮れに入会しました。

「一生懸命、励んだ分、福運になるのよ」と教わった私は、その言葉を信じ、無我夢中で学会活動に走りました。友人の飲食店を手伝いながら生計を立て、娘たちには手作りの服を着せました。

その後、自分の飲食店を開業。従業員は、私一人。もちろん、経営に関しては、素人。接客の仕方も分からず、ただひたすら、客の話を聞いていました。身の上話も多いのですが、不遇な環境で育った分、自分のことのように感じ、客と一緒に泣き、笑う日々でした。

それが良かったのでしょうか、「親身になって聞いてくれる店」「素人らしさがいい」と評判に。やがて、「町で一番、客が入る店」と紹介されるまでになりました。

平成21年に、28年間経営した店を閉めました。当時のお客さんが皆、味方になってくれ、昨年は聖教新聞の購読推進を125部することができました。家も改築し、地域広布の会場として使用していただいています。

3人の娘も、学会家族の温かさに包まれ、まっすぐに成長。皆、幸せな結婚ができました。それぞれの主人が42歳になった時、ホッとしました。私の夫が亡くなったのが、41歳だったからです。

真っ暗な夜空でこそ、星は綺麗に輝きます。私にとっては、宿命の暗い夜は、全てのことを輝かせる使命の舞台だったのではないかと、最近、ふと思うのです。

（『大白蓮華』2012-9：48-49）

この例は、最初のタイプ１のように分析していけば、最初の段落だけでも起承転結や「オリエンテーション」、「事態の展開」、「評価」、「結果」などと分析することができるだろう。しかしここではそれほど細かくなく、大きくとらえてみよう。

レトリックとして、明るさ、暗さ、電気などの妙にも目が奪われるが、プロットとしては不幸な半生が描かれ、そこから信仰をはじめ、自分の飲食店を開業し、子どもを育て上げた、というご利益の体験談とみることもできるだろう。しかし最後の段落に、「真っ暗な夜空」に例えられる「宿命の暗い夜」を「星」のごとく「全てのことを輝かせる使

命の舞台」に例えている点は、聞かなければわからない、体験談らしいところである。つまりこれまでの出来事が、自分にとってどんな意味があったかが示されている。父母を幼くしてなくし、引き取られた親戚での扱いに耐え切れずに駆け落ち。家族としての幸せをつかんだかに見えたが、夫との死別。子どもを3人抱えての生活。客観的に見て、あるいは過去においては、誰もが不幸としか思えない状況が、本人にとっては幸福への土台となっているという解釈は、大きな意味の転換を含んでおり、＜転＞を経た後の＜結＞といえるだろう。このように、これまではとても不幸だとしかおもっていなかった自分の人生に、ある時に新たな意味を見いだすタイプである。ただ、タイプ３と異なるのは、＜転＞にあたる劇的な体験が欠けているのである。

タイプ５　「自利（から）の＜転＞」体験談

タイプ４の大きな意味転換を伴う体験談で、劇的な＜転＞の出来事が生じている例を挙げよう。タイプ５として、自己の不利益が利益となる＜転＞の体験談である。

困難に直面したとき、人はしばしば自分の利益を願う。この段階を本稿では「自利」の段階と呼ぶ。この願いが叶うと人は（100% ではないがある程度の割合の人が)、信仰を継続することができるのであろう。この信仰の活動を続けていく中で、ある時転機が訪れ、これまでのできごとの意味が転換していく。この段階においては、自分の利益を必ずしも追求しなくなる。タイプ２のように、顕在的なご利益がない場合にも似ているが、利益がなくても自己の不利益が利益となる転機であり、これを「自利（から）の＜転＞」と呼ぼう。

以下は、川端・稲場（2018）でとりあげたアメリカ SGI の機関紙『ワールド・トリビューン』に掲載された体験談を日本語に翻訳したものである。

「本当の私になる」

私は、日本でシャイな少年として育ちました。中学生になると、私の身体は変化し始め、そして、その変化に私は非常に強い自己嫌悪を感じたのです。大学に入った１年目、私はこの苦しみがどこから来るのか気がつきましたー私は、女性になりたかったのです。

このジェンダーについての困惑（gender confusion）を大学のガールフレンドに話すと、彼女は、私が感じるところを信じ、進みなさいと励ましてくれました。それで、女性らしい服を着るようになりましたが、他人にどう思われるか怖かったのです。

1994 年のこと、駅ですれ違った男から、「気色悪いやつ」と言われました。それ以来、自分の本当の姿をさらすことが恐ろしくなり、出来なくなったのです。

３年後にロサンゼルスに来て、自分の本当の心と姿は傍において、TV 制作会社で働き仕事に集中しました。しかし、心は深く落ち込み、疎外感を味わうばかりでした。

2002 年に仕事がなくなってしまい、就業ビザが切れそうになったピンチのとき、

友人から日蓮仏法を紹介されました。そして、人生を変えたいと心から強く願って、南無妙法蓮華経と唱え始めたのです。

その年の 11 月、御本尊をいただき、SGI-USA のいろいろな活動に参加するようになりました。するとまもなく、新しい仕事も見つかり、グリーンカード（永住権）の申請もできるようになったのです。生活が安定したので、私はジェンダーの問題が解決できるよういっそう熱心に唱題をするようになりました。

ある日、私は泣きながら御本尊の前で、女性になりたいと祈っていました。そのとき突然、この苦しみは、じつは苦しみでなくかけがいのない賜物（gift）なのであり、私が人生を本当に正しく理解できる貴重な機会なのだと気がつきました。この見方の転換によって、私はセラピストの診察を受ける決意をし、ジェンダーを換えるための勉強を始めました。（World Tribune 2010-5-21: 6）

女性になりたかったと気づき、「気色悪いやつ」といわれ、心は深く落ち込み、仕事はなくなり、就業ビザは切れそうになった＜起＞から始まり、南無妙法蓮華経を唱え、ご本尊をいただき、熱心に唱題する＜承＞、そして「ある日、私は泣きながら御本尊の前で、女性になりたいと祈っていました。」という＜転＞を迎える。「この苦しみは、実は苦しみではなく賜物であり、私が自分の人生をほんとうに理解できる機会なのだ」と捉える視点の転換が、生じている。つまり、自己の不利益を利益ととらえている。そうなれば、自己の不利益から現実的な利益を生じるかどうかは、問題とはならない。これが利己的な心、自利の心から脱却する契機である。

タイプ６　利他性に向けた＜転＞

ご利益は、困難な状況にある自分が、そこから回復することである。これは利己的な行為である。しかし、タイプ３で見たように、他人、とくに家族や親せきなどのご利益を願うこともしばしば行われているだろう。このタイプの＜転＞は、ご利益信仰（自利）から利他主義への転向の途中経過の一つのパターンである。まったく利己的なご利益信仰から、身近な人の幸せを願うご利益志向をへて、他人の幸せを願う大乗利他へと転換していくケースがみられる。

ここには民間信仰等とは異なる、宗教教団の特徴がみられる。民間信仰のご利益、例えば、お百度参りには、「一般的な他者」への利他へ変化していく契機がない。しかしながら、創価学会をはじめ、教団の場合は、教団内のさまざまなシステムがあり、それらによって現世利益から利他的な行為や祈りへの転換が行われる。西山（2012）は、これを自利利他連結転換装置と呼んでいる。

西山は、「自利」すなわち「自身とその周辺の現世利益（功徳）を志向する」（西山 2012、49）状態から利他、すなわち「他者や社会の幸福増進のため（そして究極的には超越的存在のため）の献身を志向する」信者への変換するために教団が持つしくみを検

討している。そして「「連結」とは、「自利」と「利他」とを結びつけ、「自利」は「利他」の活動を通してこそ得られるものであるという宗教的信念を、信者に納得して貰えるようなかたちで両者を架橋することである」としている。創価学会おける「自利利他転換連結装置」として指摘されているのは、唱題勤行、折伏弘教、座談会やその他の集会への出席、御書講義を受けること、聖教新聞の拡張、選挙活動に励むこと、民音（民主音楽協会）のコンサートに出席すること、社会活動や平和運動などである。

「自利」から「利他」へ転換する体験談を例として、その転換の働きを具体的に明らかにすることは、宗教とボランティア志向の関係を読み解く糸口ともなるはずである。組織の活動、とくに役職者となって、人の面倒を見るところに「一般的な他者」への利他に変化していく組織的なしくみがある。つまり、自我の発達でミードがゲームをあげたように（ミード 1995）、ルールに縛られることによって、「一般的な他者」に対する利他性が発達するのである。

タイプ３で見たように、大っ嫌いだった父にたいして、心の底から「父さん、幸せになって」と祈ることができた娘は、「自利」から「重要な他者の利」に変化しているだろうし、あんなに嫌っていた父にさえ祈ることができれば、他人にも祈ることができるようになるだろう。

川端・稲場（2018）では、HIV ポジティブだと診断されたピーターさんの例が挙げられている（pp. 58-59）。

> 1994 年に HIV ポジティブだと診断されました。（中略）94 年に診断されて、とても意外だったし、またショックでもありました。だって、多くの人がエイズで亡くなってから 14 年後なんですから。その間、多く「安全なセックス」で、多くの題目をあげ、多くのお葬式にもでて。私は信仰者となっていたのに、何で、なぜなのか、わからなかった。
>
> でも、わたしは診断されました。ウィルスは私の体内に 15 年間、棲みついていたのだろうか？私は医者のところに行き、検査などを受けました。ある日、私は、これは間違いだと思いました。しかし、医者は間違いではないと言ったのです。この診断に私はとてもびっくりしました。多くの人たちもエイズと診断されて、何か分からないうちに死んでいきました。それからずっとたって、私は何も危ないことをしてなかったのに。
>
> だから、私は心配するのをやめました。で、判明したことによって、自分の命に対して、非常に感謝するようになりました。また同時に SGI に対する関心もさらに深まっていきました。これは証明するのは難しいですが、もし私が信心していなければ、今日、このような健康状態で生きていることはまずないでしょう。本当にミスティックという意味で、妙法というか、不思議というか、不可思議で、説明しろといわれるとできません。なぜ私がこうやって、信心でもってここで生きているのか。

また、タイミングも絶妙です。「転重軽受」[5] という言葉がありますね。仏法の教え、実践のお陰で転重軽受というコンセプトを自分の中で体現することができて、深い自分の宿業を、軽くこういった形で受けていることができていると確信しています。

また、さらにもう一つは、もっと深いところで、こういったことを人々に話すことができる自分というものがいるのがすごいと思っています。とくに、自分と同じように病気で怖がってる人、恐れてる人、そういう人に自分の体験を語って、その悩みを軽減してあげられるのです。

この体験談の抜粋は、一つの起承転結の物語としては、＜起＞と＜承＞の部分は省略されており、＜転＞と＜結＞の部分だけにあたる。これは、HIV ポジティブだと診断された＜転＞において、さまざまな心配をしたのちに、心配するのをやめる、それによって、自分の命に対して、非常に感謝するようになり、SGI に対する関心もさらに深まっていく。そして、HIV ポジティブであることをメンバーに話すことで、「自分と同じように病気で怖がっている人、恐れている人、そういう人に自分の体験を語って、その悩みを軽減してあげられる」という利他性を身につけたのである。ここにみられるのが「一般化された他者の利への＜転＞」である。ここに至っては、自利は見られないといってよいだろう。

４．「自利」からの転換

３節で取り上げた事例を再度、簡単にまとめると、以下のとおりである。

タイプ１　自分の利益を願う。その結果それが実現する体験談。
タイプ２　自分の利益を願う。しかしそれは実現しない体験談。
タイプ３　重要な他者の利益をねがう。しかしそれ以外に潜在的な別の願いが叶う。
タイプ４　＜転＞不在の体験談
タイプ５　「自利（から）の＜転＞」の体験談
タイプ６　一般化された他者の利への＜転＞

宗教の体験談の基本はご利益の体験談である。タイプ１で見たように、当初願っていたご利益が、信仰活動をつづけ、何かが起きて成就することが、起承転結という形式のナラティヴとしては基本の形である。しかし、＜転＞に注目してその前後の違いを注意してみると、最初に願っていたのとは、異なることがご利益として達成されているというタイプがあった。つまり、顕在的剥奪は満たされないが、潜在的な剥奪が満たされるというタイプがあった。またそれは世俗的な側面での効果を期待し、宗教的な行為を続けた結果、世俗の効果は定かではないが、宗教的な成果が得られたというタイプもあった。つまり、顕在－潜在という意味や世俗－宗教という面において、二重構造をなしているタイプを見出すことができた。そして、ナラティヴとしては、劇的な出来事としての＜

転＞が必要であるが、体験談の中にはタイプ４のように、＜転＞としてのイベントを欠くものもあることが分かった。

そしてご利益は自分の利益、すなわち「自利」の追求であるが、教団宗教においては、「自利」から「利他」へと転換していくケースがかなり多くみられる。その契機は、タイプ５のように、自利から自分の不利益でも利益と思える「自利（から）の＜転＞」というタイプが「自利」からの脱出の一つのモデルであり、またもう一つは自分の利益から家族などの重要な他者への利益に、さらには一般的な他者の利益を願うように変わっていくという過程が考えられ、一般的な他者の利益を願うタイプ６の事例を挙げた。

以上のように宗教的な体験談を起承転結の形式、とくに＜転＞に注目することで、ご利益の重要性と、さらにはそのご利益から利他性への転換を考察することができた。

ただ、＜転＞にはさらに多くのタイプを考えることができるだろう。自利から利他への転換とともに、ご利益を願うだけである他力信仰から、自分の努力も強調する自力信仰への転換の要因を特定してあげることも必要であろう。さらに本稿では創価学会の体験談を検討したが、他の教団の体験談にもあてはまるかどうかの検討が必要である。

謝辞

本稿は、科研費挑戦的萌芽研究「ライフヒストリー法の革新－ UML による記述」（課題番号 15K13069）の研究成果の一部である。また大阪府立大学の秋庭裕先生に多くのコメントをいただきました。ここに記して感謝します。

注

1）本稿で扱うような体験談の良し悪しは、客観的に判断することは難しい。ガーゲン (1985：272) は、このような文章がうまくいっているかどうかは、真実性（veracity）の基準に基づくのではなく、読み手や聴衆を惹きつけ、刺激できるかどうかであると指摘している。本稿もガーゲンに従い、そのような体験談を扱う。

2）これらを対象にするということは、すなわちインタビュー調査で信仰者から体験を聞いて、それを論文等の素材として、どのように引用するのか、という問題に対する考え方を示すことになる。

3）本稿で扱うデータもラボフのいう事態の展開の部分が、アンダーソンのデータほどは長くはなく、またその詳細を分析しないために、単純な 4 段階としている。

4）このあきらめの打破は、マートンのいう潜在的機能と解釈できるだろう（マートン 1961：16-77）。

5）転重軽受とは､｢重きを転じて軽く受く」ということ。涅槃経巻三十一に説かれた法門。正法を護持する功徳によって、過去世の重罪を転じて、現世で軽く、その報いを受けるということ（池田 2007：141）。

参考文献

アンダーソン、リチャード・W.（土岐隆一郎・藤堂憶斗訳）(1994),『体験－ニッポン新宗教の体験談フォークロアー』現代書館 .

Anderson, Richard W. (1995), Social Drama and Iconicity: Personal Narratives in Japanese New Religions, *Journal of Folklore Research*, 32(3), pp. 177-205.

Gergen, Kenneth J. (1985), The Social Constructionist Movement in Modern Psychology, *American Psychologist*, 40(3), 266-275.

川端亮・稲場圭信 (2018),『アメリカ創価学会における異体同心－二段階の現地化』新曜社 .

Labov, W. (1972), *Language in the inner city; Studies in the black English vernacular*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

ミード、G. H.（河村望訳）(1995),『精神・自我・社会』人間の科学社 .

マートン、R. K. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳）(1961),『社会理論と社会構造』みすず書房 .

西山茂 (2012),「日本の新宗教における自利利他連結転換装置」『東洋学研究』49, 49-57.

リースマン、C. K. （大久保功子・宮坂道夫監訳）(2014),『人間科学のためのナラティヴ研究法』クオリティケア .

創価学会関連の出版物

『大白蓮華』

池田大作 (2007),『一生成仏抄講義』聖教新聞社 .

World Tribune

The structure of narratives of religious experiences: An examination of cases of "turns"

Akira KAWABATA

This paper investigates the process by which new believers deepen their faith in a religion. In order to understand this process of deepening faith, we may consider religious experiences to happen in several stages/processes (time-series structure) and religious interpretations in a believer's life to exist at each stage/process (semantic structure). A story with a certain amount of experience is defined as a narrative in this study. Semantic structure analysis of such religious narratives is not pursued in detail, but the time-series structure is analyzed in terms of *ki-sho-ten-ketsu* (the structure of Chinese and Japanese narratives, consisting of four stages: An introduction, development, turn, and conclusion). The basic form of this four-stage narrative structure is as follows. First, the condition until the start of religious activities is summarized as the "introduction." In the case of religion, this is often a situation of hardship or deprivation. Believers typically begin with benefit-oriented beliefs. Next, they are invited to a religious group and perform rituals, which is known as the "development," after which a major event such as a beneficial experience occurs, which will be called the "turn." The part where a new interpretation is added and the new believer accepts the teaching or the faith is deepened is the "conclusion." Six experiences are analyzed within the framework of this four-stage narrative. Our results show that the achievement of the believer's desire at first is not necessarily important, but on the other hand there are cases where latent benefits and religious benefits different from the initial desire are achieved. In addition, some religious narratives show a shift from self-interest to altruism, though the benefit in religion is often based on the pursuit of one's own interest.